

巻頭言

『石鉄』第五十一号刊行に寄せて

松山短期大学学長 上杉 志朗

昨年わたしは『石鉄』が第五十号の刊行を迎えたことを受けて、『「半世紀」にわたって続けてきたことは重く受け止めたい。』と冒頭で述べた。そして、第五十一号の刊行である。

些か私事を交えると、実は、わたしは現在五十一歳で、なんと『石鉄』が号数を重ねると同時に馬齢を重ねるという仕組みになっている。

前回の巻頭言において『いまは「人間五十年」などとは言わない』と偉そうなことを言ったのだが、どうもそうは行かないらしい。五十年以上も酷使してきた自分に色んな所に異変を生じ、思うように動かない事が明らかになっている。同い年の主治医からは「考えてみて下さいよ。五十年モノのクルマだったら、パーツを随分と交換しないと動かないでしょう。人間だって同じなんですよ。」と諭される始末。それもそのはず。個人としての人間は、ギネスブックに載るような長寿でもせいぜい百三十歳が限度である。顧みれば、折り返し地点はとうに過ぎているのだからガタも来るはずである。五十年は重いのだ。

ところが、自然界においては五十年や百年はまだまだ駆け出しなのである。『石鉄』の扱ところの石鎚山を引き合いに出さずとも、何万年とか何億年という途方もないスケールで物事は進んでいる。そんな自然を相手にすると、私たちは何故か「山はずっと動かない」とか「悠久の歴史を刻みいつも変わらない自然」などと思い込んでしまうようだ。本当のところはどうだろうか。

ただ一見しただけでは全く動いていないと思える岩も、雨に打たれて何万年もすると形を変えるし、川の流れを経れば、角が取れ、砕かれ、河口に至る時には細かな砂になる。地震のメカニズムにあるようにプレートは徐々に移動している。二酸化炭素の人工的な排出増による急激な気候の変動を持ち出すまでもなく、人類が生まれもしない太古から地球は環境を変化させてきている。そして、その変化に気づくかどうか、対応するかどうかは、わたしたち次第ということではないだろうか。

松山短期大学は、人間や自然ではなく、組織である。組織もまた不変の存在ではなく、常に新陳代謝を続け、環境に適応して行かねばならない。『石鉄』は松山短期大学を映す鏡のようなものだろう。新陳代謝や環境への適応は出来ているのだろうか。

『石鉄』が五十一号の刊行を迎えることができるのは、大変素晴らしいことである。立派な印刷物となり、冊子となっているのを見ると、第一号よりも見栄えが良く誇らしい気持ちがする。同時に、情報技術がこれほど進んでいる二十一世紀、また、国会図書館のデジタル化すら進む今日にあっては、刊行の様式や媒体の見直しも含め、環境への適応をした進化形も見てみたいという気持ちがするのだが。